

# 都市開発研究

## NO.9

特集：都市再生と環境問題

2002.5

株式会社 都市開発技術サービス  
都市開発技術研究所

REVIEW

URBAN DEVELOPMENT

ENGINEERING

# 視座のあるまちづくり

室井 隆 良

(株)都市開発技術サービス 取締役都市計画部長

## はじめに

今年（2001年）の6月に都市公団を退職し、送別パーティーで配られた小冊子の「在職中の想い出」の欄に以下のことを書いた。

### 〔①山を造ったこと〕

多摩ニュータウンで、「盛土場所がなくて街びらき工事がストップしてしまいそう！」という機（奇）に乗じて、鶴牧東公園の芝生広場を山にしまったこと。【鶴牧山】

### 〔②山を残したこと〕

飯能ビッグヒルズで、計画見直しで切られそうな運命にあった山（標高217m）を、策を弄（勞）して南台第二地区の近隣公園予定地の中にナントカ残したこと。【朝日山】

### 〔③山に登ったこと〕

ワンダーフォーゲル同好会の仲間と、北は利尻岳から南はキリマンジャロまで、いつも楽しく登ったこと。

③はさておき、①と②について、後日何人かの方から質問を頂いた。大体はそれぞれの経緯に興味を持たれてのお尋ねで、概要はお話したが、言葉だけでは伝わらない「それなりの理由といきさつ」が色々あったことを自分でもあらためて感じた。そのようなことから、本誌の誌面を借りて「それなりの理由といきさつ」について解説することにしたものである。本誌が研究所が発

刊する機関誌であることを意識し、研究レポート風な体裁に心がけたつもりであるが、事柄上想い出話的記述がやや多くなってしまい反省している。ご容赦願いたい。

## 1. 都市景観論における『山』の登場の仕方

最初に、都市の風景論や景観論の中に『山』がどのように登場するかについて、最近出版された風景に関する二冊の本、「風景学・実践編」（中村良夫著/中公新書/2001）「登山の誕生」（小泉武栄著/中公新書/2001）から、過去のいくつかの風景論・景観論の本にも遡りながら少し触れてみたい。

「風景学・実践編」は、中村先生が以前に書かれた「風景学入門」（中公新書/1982）の続編にあたる本で、風景の目利き、風景の見立て方としての実践編で、風景が立ち現れる要因を(1)視点 (2)言葉 (3)身体 (4)場所 (5)生成に分類し解説している。「風景学入門」でも「日本名山図会」の引用など山についての記述が多かったが、本書においても名山または古典としての地相から丘の辺の町にいたるまで、山の名が頻繁に顔を出す。また「日本の景観」（樋口忠彦著/春秋社/1981）で著者が「日本の風景の原形は水辺山辺」と言い切っているとしなが

ら、水辺や山辺のような都市の縁は都市記憶の要所であると述べている。

ここで引用されている「日本の景観」を書かれた樋口先生の最初の著書「景観の構造」（技報堂/1975）は、四半世紀も前の本ではあるが、日本における典型的なランドスケープ空間の空間構造の類型化が印象的で、今でも一番分かりやすい都市景観の参考書ではないかと思う。

<ふるさと><故郷>としてのランドスケープ空間論にも言及した内容で、(1)水分神社型 (2)秋津洲やまと型 (3)八葉蓮華型 (4)蔵風得水型 (5)隠国型 (6)神奈備山型 (7)国見山型の7つの空間構造に類型化され、図で解説されている。ここでは次章以降で取り上げる秋津洲やまと型（図-1）国見山型（図-2）の空間構造のみ示し他の型は略すが、いずれの型においても、境界としての山、中心としての山、ランドマークとしての山など、山は重要な構成要素になっている。

最近の二冊のもう一冊の本「登山の誕生」の著者の小泉先生は、自然地理学を専門にされていて、この本を出される以前にも「山の自然学」

（岩波新書/1998）という山好きな人間にとっては、大変面白くためになる本を出されている。「登山の誕生」でも前書同様、知的登山、博物学的登山を推奨されていて興味深い。

本のタイトルからして都市景観論とは畑違いの本のようであるが、日本の近代風景論の嚆矢として中村・樋口両先生の著書でも度々紹介される「日本風景論」（明治27年出版・岩波文庫/1937は復刻版）の著者志賀重昂が、この本においても登場するので取り上げた。

志賀重昂は、日本の山岳会誕生を説明する以下のくだりで登場する。「登山思想を最初に紹介したのは地理学者の志賀重昂であり、日本山岳会設立の功労者は小島烏水である。（中略）ラスキンの『近代画家論』を読んで、尖った峰や水河、湖、あるいは溪谷などのつくりだす自然の美を知った志賀が、それを日本に置き換えて『日本風景論』を書く。その本の中で志賀は、日本の風景のすばらしさを論じ、登山の効用を大いに鼓吹して、登山熱を煽った。」

つまり日本の風景論・景観論の原典ともいえる「日本風景論」の志賀重昂の思想は、大きな

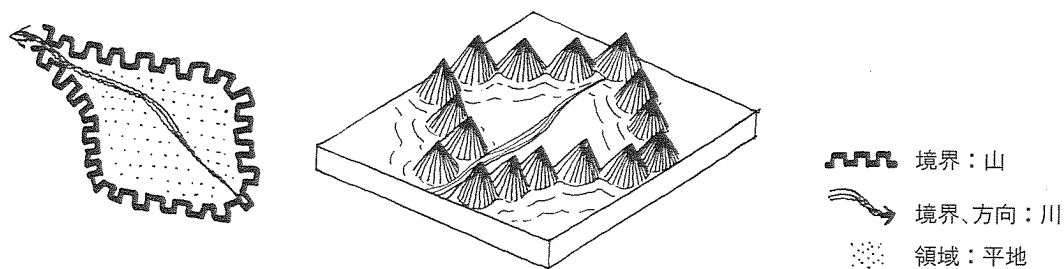


図-1 秋津洲やまと型空間

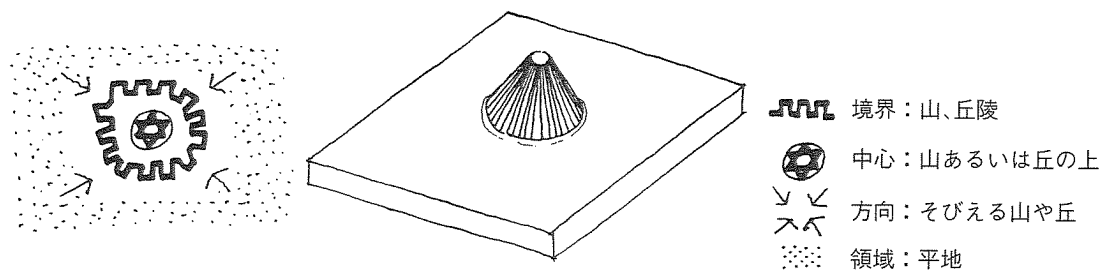


図-2 国見山型空間

二つの流れに分かれて現代に伝わっていると言えよう。一つは当然のことながら自然景観論・都市景観論に発展する流れであり、もう一つは日本の山岳界とりわけ先鋭的なアルピニズムではなく博物学的登山活動に連なる流れである。

山にこだわりながらまちづくりの景観計画を考へることも、あながち常軌に外れた行動ではないということが、以上のことからご理解頂けたであろうか。

特殊法人改革で最近頻繁にマスコミに登場する猪瀬直樹が、若き日に志賀重昂論を書いている(「日本風景論解題」飯塚書房/1979)……(蛇足)

## 2. まちに山を造る…鶴牧山 (多摩ニュータウン・鶴牧東公園)

### (1) ニュータウンの空間計画と視座

鶴牧山は、「景観の構造」の類型からすると「国見山型空間」にあたる。公団のまちづくりの中で造られた山は、古くは港北ニュータウンの川



写真一 川和富士



写真二 たつのこやま



写真三 きよみ野富士

和富士(写真一)から、比較的新しいところで龍ヶ崎ニュータウンのたつのこやま(写真二)や吉川地区のきよみ野富士(写真三)など幾つかあるが、いずれもこの類型に該当すると考えられる。

国見山型という呼称から想定されるスケールにはおそらく到達してはいまいが、近隣公園という限られたスペースの中で実現するには、独立して平地に突出した国見山型が最も適した類型ということであろう。上記のそれぞれの事例は、公園空間の中に国見山型空間の創出を試みた公団のまちづくり仕様のプロトタイプとして位置付けられようか。

鶴牧山は、多摩ニュータウン11住区の近隣公園・鶴牧東公園の中にあり、1982年春の落合・鶴牧地区(10・11住区)の街びらきにあわせて整備された。1960年代に次々とスタートした宅地供給型の大規模ニュータウン開発の首都圏域における代表である多摩ニュータウンの事業が初めて居住者を迎えたのが1971年春(諏訪・永山地区)、1976年春の第2次入居(貝取・豊ヶ丘地区)を経て、第3次入居エリアになったのが落合・鶴牧地区である。センターゾーンを抱える地区であることからニュータウン中心部にふさわしいより魅力ある空間づくりを目指し、入居に先立って大幅な計画見直しが行われた地区である。

計画見直しの基本理念は、「多摩ニュータウン環境計画報告書」(1977)にまとめられているが、特徴的なことは、景観計画という視点からのア

アプローチで新しいまちづくりに真正面から取り組んでいることであろう。前掲書「景観の構造」が発刊されて間もない時期で、見直しの議論の中でもこの本のことが話題に上がっており、少なからぬ影響を受けていたと思う。多摩ニュータウン「ヴィジュアルプラン」という章をもうけ、「地区は明確な全体的構造を有すること」以下8項目の指針を掲げており、最後の項目に「上記の構造が視認できるような視覚的空間構造を形成すること」があるが、具体的な『視座』についての記述はない。

継続調査としてまとめられた「多摩ニュータウン10・11住区1978報告書」の中で基幹空間として提案された構造化されたオープンスペースの中に『視座』と呼ばれる場が登場する。つまり、このことは地区の全体構造を視認できる場を、地区の中に造り込むことにしたことを意味する。

図-3の基幹空間の構成で強い貫入閾と表示されている軸線が、多摩ニュータウンのオープンスペース計画の事例写真としてよく紹介される富士山へのヴィスタを強調した富士見通りと呼ばれる空間である。この軸線上にも二つの『視座』があるが、別の弱い貫入閾の中に表示されている軸線上にあるもう一つ『視座』が鶴牧山である。

『視座』のもつ意義とは？ 前掲書「日本の景観」では眺望のある景観について以下のように解説している。

都市の中の丘の上や都市周辺の山の辺の眺望について、石川栄耀の「丘陵上より見る鳥瞰図的な都市の美しさはまことに人生的である。自然の中にはぐくまれつつ、生々流転していく都市。その美しさが眼前に展開する。まことに愛市の実感は丘陵の上においてのみ味わえると云いたい。」という言葉と、クリストファー・アレキサンダーの「だれもが気軽に登れ、くつろいで休息しながら自分たちの住む町を俯瞰できるような場所を、地形や建物を利用して、都市の中に人口七千人ぐらいの住区ごとに一つの割合でつくりだしなさい」という具体的な提案を記し、眺望地点は、愛市の感覚が自ずと湧いてくるような程よい高さのものでなくてはならず、超高層のビルからは、愛市の感覚は味わえないと結んでいる。

まちの『視座』の価値とデザインについて、この1ページが語り尽くしていると私は思う。

## (2) 鶴牧山が出来るまで

入居に先立って行われた計画見直し内容が具体化しはじめた時、今では考えられないことだ

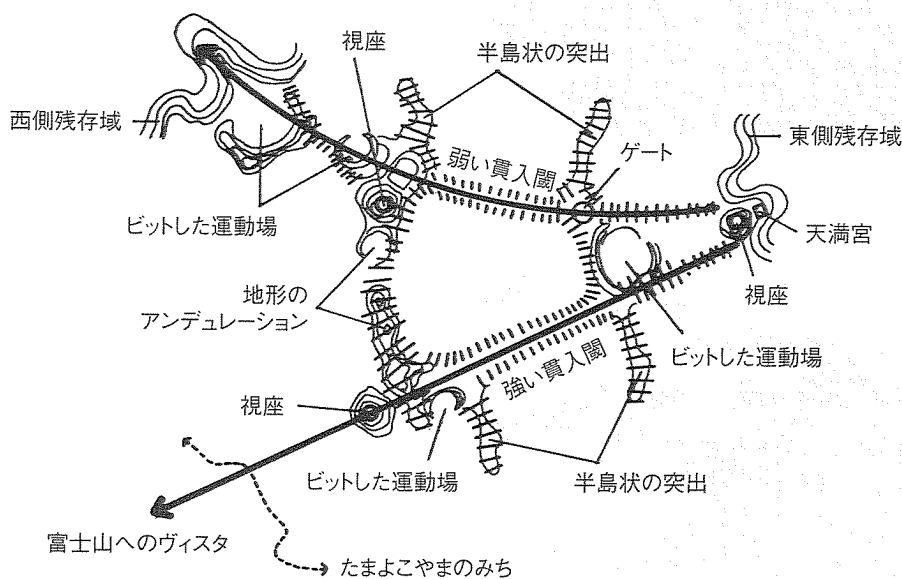


図-3 基幹空間の構成

が、既に現場の造成は路型まではほぼ完了し橋梁（歩道橋）工事も進むなどすべてが進行形だった。そんな中での計画見直しであったが、幹線道路と出来上がってしまっている歩道橋を除いた全面的な土地利用計画の見直しということになり、見直しの中心は公園や歩行者専用道路等緑とオープンスペース計画で、4つの近隣公園とリング状に繋ぐなどして拡がりを持った骨格空間＝基幹空間を造り出すことになった。

結局4つの近隣公園すべてを一斉に都市計画変更し、小中学校5校もすべて位置変更するというドラスティックな変更になった。

当時多摩局の事業計画課にいた私の仕事は、専ら変更計画を実現するための対外調整であった。1982年春の入居が決定している中で、変更設計等の作業と、現場の工事は全く並行作業で進められ調整時間は極めて限られていた。将来公園を管理する市からの多くの要望、小中学校の位置変更に対する教育委員会の強い抵抗、時間はない、でも進めなければならない。「大筋で変更計画が実現さえすれば……」私は妥協の達人になっていた。

見直し計画の策定作業は、日本都市総合研究所の松本敏行さん（平成10年に急逝された）が計画理念をまとめ、ウエノデザインの上野泰さんが図面を引いていた。これも並行作業で順序が逆転したりもしていた。

鶴牧東公園は既に全体が平坦に造成（切土）されており、当初のプランは樹林地と芝生の多目的広場になっていた。都市の中の森をというのが上野さんの当初の基幹空間イメージであったが、将来公園を管理する市から色々な運動施設の導入を要望されていて、なかなか思い通りにならない中で、多摩東公園は比較的上野イメージに合致した公園だった。

工事がどんどん進む中での見直しだけに予期せぬ出来事が次々と起り、見直しを進める計画屋と現場を動かす工事屋との間は常にバトル状態にあった。毎日のようにキツイ注文を付けに来る設計係長のKさんが、ある日いわく、「この計

画で入居エリアを完成させるにはどうしても8万m<sup>2</sup>の土が余って土量がバランスしない。すぐに盛土場所を造ってくれないと入居が止まる」。8万m<sup>2</sup>の土で入居がストップするというのも奇妙な話したが、当時の多摩ニュータウンは、本当に盛土エリアの確保に苦心惨憺の状態だった。置いていった図面を見ると几帳面なKさんらしく盛土出来そうな場所はことごとく色鉛筆で塗られていた。

私は多摩東公園の芝生の多目的広場を築山にしようと考えた。まず見直し計画の総指揮官だった浅谷部長（現当社特別顧問）の了解を取りに行く。「ウン…。周りの低層住宅のプライバシーを気にしなくてはいかんな。」あまり賛成ではない様子だったが、反対はされなかった。上野さんはといえば、唯一あまり妥協がなかった公園での、今度は工事屋との妥協、大いに不満気である。しかし、とにかく入居最優先、不承不承ながら直した上野さんの図面はすぐにKさんへ。切土した上に盛土をするという非経済的な工事が、超効率的に進んで瞬く間に山が出来上がった。

出来上がった山の計画動機づけは、松本さんの仕事である。『視座』という言葉を持ち出してきて、この山が最初からこの場所なくてはならなかったかのような計画案に仕立て上げた。図-3の強い貫入闕上の視座は、前富士として仰角も高さもきちんと計算され計画的に造られたが、鶴牧東公園の視座は、盛土量を最大限考慮して造られた。計画見直しメンバー全体の最大の関心事は、目玉空間である富士山への軸線が開けた強い貫入闕にあったが、私は一人鶴牧東公園の『視座』の出来栄だけを気に掛けていた。（図-4）

「多摩ニュータウン環境計画報告書」になかった『視座』という言葉が、何故「多摩ニュータウン10・11住区1978報告書」の中に登場したかは、以上のような経緯によるが、今この報告書を読み返しても、鶴牧東公園の山は土が余って困り果てたあげく造った山だなんてこと誰にもわからない。むしろこの報告書に描かれた計画が、

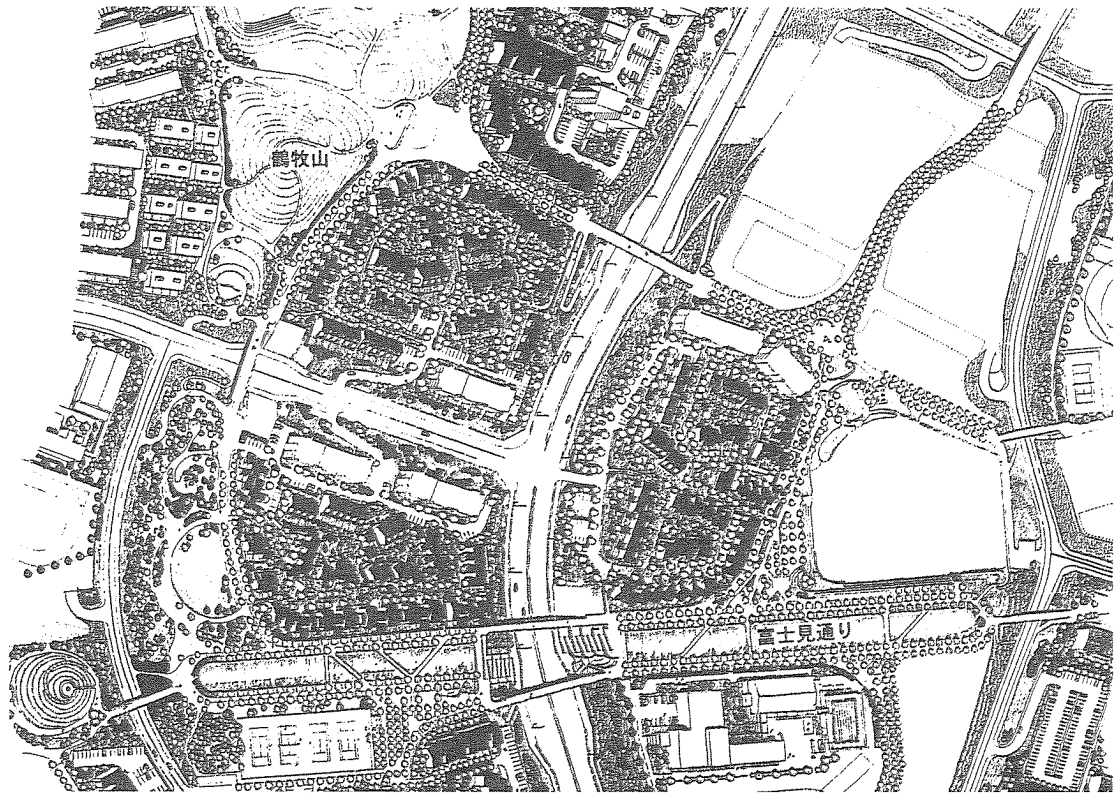


図-4 富士見通りと鶴牧山

あまりにも全面的かつ忠実に現場に再現されていることを、多少訝しく思うことであろうが、これは前述のとおり計画見直し作業も実施設計も現場の工事もすべて並行作業であったのだから当然の結果である。

### 3. まちに山を残す…朝日山（飯能ビッグヒルズ・南台第二公園）

#### (1) 飯能の自然とビッグヒルズ

朝日山は、飯能ビッグヒルズと総称される飯能三地区（南台・南台第二・大河原）の中間部に位置する南台第二地区の中にある。近隣公園（未整備）内に包含される山という形態だけ見れば、「景観の構造」の類型としては鶴牧山同様「国見山型空間」であるが、ここではより大きな景観領域でとらえて、あえて「秋津洲やまと型空間」に分類したいと思う。その理由については経緯を含め後述する。

飯能市は江戸時代から林業で栄えたまちで、西川材と呼ばれる材木を入間川、高麗川を利用して筏に組んで流送し、平坦部は市域面積のわ

ずか3割で市街地は市の東端部（東京都心側）に集中し、それ以外の広い区域は現在も山林である。その奥は秩父連山に連なり、都心と結ぶ西武線の飯能駅もスイッチバックで秩父方面に向かう終着駅的雰囲気を持つなど将来にグリーンフロントといった場所である。

三島由紀夫の「美しい星」の舞台になった星空に近いまちであり、市のキャッチフレーズどおりの緑と清流のまちなのだが、特筆すべきは緑も水も極めて市民に身近な形で、多くの人に利用されるオープンスペースであるということだろう。

中心市街地近くに登山口がある天覧山と多主峰山を結ぶ稜線は小学生の遠足コース、多くのハイカーが訪れる有数のハイキングコースであるし、飯能河原と呼ばれる入間川沿いのスペースは、初夏から秋にかけてのウィークエンドや夏休みシーズン中には河原まで乗り入れた車で溢れ、バーベキューを楽しむ家族連れやグループで賑わう。駅至近の場所にそのような空間があることに驚かされる。首都圏の近郊レクリエーション拠点として、年間300万人のビジターが飯能市を訪



れるといわれている。

前掲書「風景学入門」に次のような記述がある。「川が汚れてきたのは、さまざまな理由があるが、結局、人の生活が川から離れたためである。川の景色をよくしようと考えるなら、もっと日常生活で川をつかいこむほうがよい。(中略)それゆえに風景は、見るものでなく用いるものであるともいえるわけで、用い方にふさわしい空間をととのえておくのである。」将に、飯能の自然は、山も川も用い方にふさわしい空間としてつかいこまれているのである。

飯能ビッグヒルズは、天覧山と多主峰山を結ぶ丘陵地と入間川を挟んで対峙する丘陵地に位置する。遠隔地かつ急峻な地形等の厳しい地区条件を有することもあって、先行する南台地区は、事業認可迄にかなり時間を要し、オイルショック後の住宅需要の冷え込む中で集合住宅用地を施設用地に転換する等、美杉台という町名で1989年春に行われた街びらきも慎重な計画見直しを繰り返しつつ迎える状態であった。

しかしこの頃から経済情勢が好転して暖かい風が吹き始め、心配していた街びらきは、売り出した建物も土地もすべて高倍率、この事が追い風になって、逡巡していた中高層住宅も設計開始、後続二地区の事業認可手続きも急ぐことになり、三地区合わせて300haのニュータウンは「飯能ビッグヒルズ」というビッグプロジェクトらしい名称があたえられた。飯能南台宅地開発事務所は武蔵丘陵開発事務所というビッグな名称の大事務所になり、私は初代事業計画課長として、今思い返すと「飯能ビッグヒルズ」の最も幸せな時期であった平成3・4年の二年間をこの事務所で過ごした。

## (2) 朝日山と回遊空間構想

着任しての引継ぎ事項に幾つかの計画見直し項目があり、その中に「近隣公園の中に残されている山」があった。「この山をカットすれば、公園の中に平坦地が増えて運動施設等の配置も楽になり、公園の使い勝手も改善される、公園面

積の一部の宅地化も可能で土地利用効率も改善される。」というもので、大勢はその方向に賛成というのである。

飯能の都市地図(1:18,000)には、217.8mという標高も『朝日山』という山名も記載されている。多摩ニュータウン時代の仕事も、全域丘陵地開発であったため尾根部の土を切っては谷戸部に埋めてはいたが、地図上に名のある山を消し去った記憶はない。罪悪感に近い抵抗感があった。

最初に近隣公園の中に朝日山を残す計画を立てた初代開発課長の篠原萬さん(現駿都市企画代表)にその趣旨を聞くと、アカシデが沢山見られる山なので残して欲しいという地元の声があったので残したという明快な答。次に「飯能郷土史」をひも解いて見た。

そこには、「飯能町の区域は、この(名栗川)両岸に沿って東西7千余の地を占める。北境は多峯主の山脈の峯線を以てし、南境は朝日山の山脈の峯線を以てする」という町の区域を定める山であることと、「大河原の東部山地を朝日山といふ。この山脈の将に終息を告げんとする丘陵地である。山容勝れ、嘗て明治神宮御造営の御企のあった時、その候補地として挙げられるや、地元民一致の熱望を以てその実現を希求した地」ということが記載されており、極めて由緒正しい山なのである。土地利用効率が良くなるからなどという、開発事業者側の身勝手な理由でカットしてもいいような山では到底ないことが分かる。

見直しの見直し。朝日山は残すべきであると考えたが、朝日山は山の形態としては小さな独立峰で地区界沿いの稜線から盲腸のように地区内に張り出しており、切ろうと思えばいつでも簡単に切れる状態で、誰が見ても確かにその方が土地利用効率は高まるのである。今回首尾よく残せたとしても、またいつの日か見直しの対象にならないとも限らない。将来二度と消し去ろうなどという見直しが起こらないようにするにはどうすれば良いか、何か永遠に残す『理由』が必要だった。



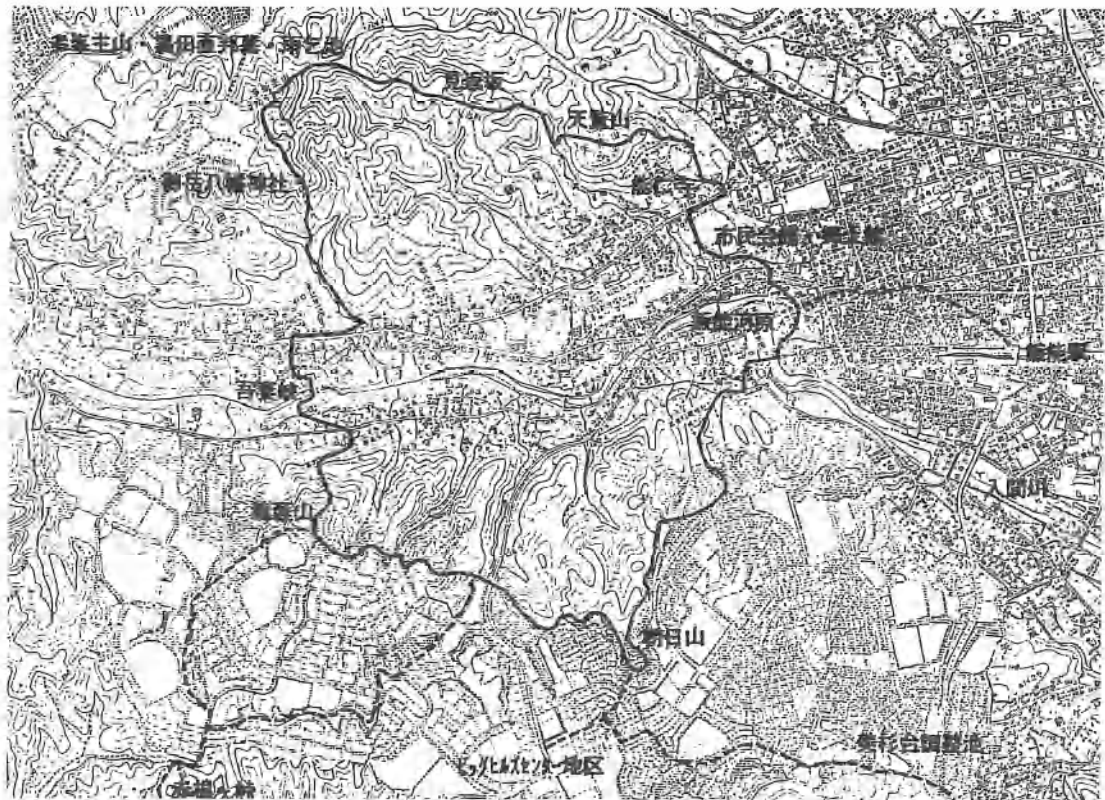


図-5 飯能の回遊空間

何度も地形図を眺めている内に、ある発見があった。ポピュラーなハイキングコースである天覧山と多主峰山を結ぶ稜線は、入間川を挟んでビッグヒルズの対岸にあるが、その天覧山の正面には朝日山があり、朝日山に連なってビッグヒルズ側にあるもう一つの地図に名のある山である龍涯山は、多主峰山の正面に対峙している。まさに「秋津洲やまと型」の空間構造である。

四つ山がスクエアに配置されていて、一辺の直線距離は1.1~1.7km一周約5.5km、入間川をうまく渡れるルートが確保できれば、秋津洲やまと型の回遊空間を生み出すことが可能である(図-5)。

問題は、天覧山・朝日山間の入間川を渡る場所には割岩橋という人道橋があるが、多主峰山・龍涯山間には橋がないということであった。この事さえ解決出来れば、新たなハイキングルートが生まれ、年間300万人のビジターが入間川を渡ってビッグヒルズにやってくる。ビッグヒルズの知名度が上がって市街化が促進されるというシナリオが出来上がった。

朝日山・龍涯山間以外はすべて地区外での構

想になるが、伊藤滋先生を委員長に国・都・県・市が参加する大委員会でも県境を越えた6000haのグレーター計画「飯能・青梅丘陵開発構想」が議論されていたバブル最盛期である、一周5.5kmの回遊空間などささやかな構想といった印象であった。

事務所の若い人達を誘って皆で弁当を持ちルートの調査に出向いた。天覧山から多主峰山へと歩き、問題の多主峰山から龍涯山に向かって入間川を渡る場所に着いた。晴れた日で水が少なければ飛び石のように渡れる場所があった(写真-4)。その飛び石を地元ではドレミファ橋と



写真-4 ドレミファ橋

呼んでおり、ハイキングルートの渡りとしては十分機能する。

そこを渡ると龍涯山への登り道は急登ではあるが、地元の人達が初日の出を拝みに毎年登る道である。龍涯山から朝日山への道は荒れているが、いずれビッグヒルズの地区界沿の整備がされればこれは問題なし。必要な予算は、地区界沿いの山道の整備とサイン（道しるべ）の設置に要する費用程度、現地調査の結果は「回遊空間づくり構想は実現化の可能性充分あり」であった。

ビッグヒルズのまちづくりにとって、飯能市のレクリエーション空間は貴重な資源である。「まちづくりはハードな整備よりも生活に根ざしたソフトな仕掛けづくりが大切」が持論の都市計画設計研究所の南條道昌さんの力を借りることにした。

ビッグヒルズでのまちづくりソフトの仕掛けは新たなレクリエーション空間の創出にありとして、まず公団発刊のまちづくり情報誌の新春号で市長さん（小山前市長）と南條さんの対談を企画した。南條さんを中心に色々な分野の人達

のコメントを掲載しながら、ビッグヒルズの未来の暮らしと風景をイメージしたまちづくり指針を取りまとめた『まちづくり読本』というレポートを作成し、その中に飯能の四つの山と入間川を巡る回遊空間のイメージスケッチをカラー刷りで折り込んだ。

当時ジェニファー・リンチの「ツイン・ピークス」というサスペンスドラマが評判になっていて、『まちづくり読本』編集担当だった都市環境プロデュース研究所の大塚洋明さんがダブル・ツイン・ピークスと命名しようかと冗談交じりに言っていたが、ネーミングはおとなしく「飯能自然の回廊」とし、公団と市との委員会を組織して具体化に向けた調査を開始した。いずれハイキングマップに回廊ルートが載ることになれば朝日山も永遠に安泰かとまで考えたところで私は異動になり、開発事務所を後にした。

## おわりに

《ふるさとの視座》北海道帯広市の駅前で平成4年から駅周辺土地区画整理事業と連続立体交差事業が一体に進められており（図-6）、連

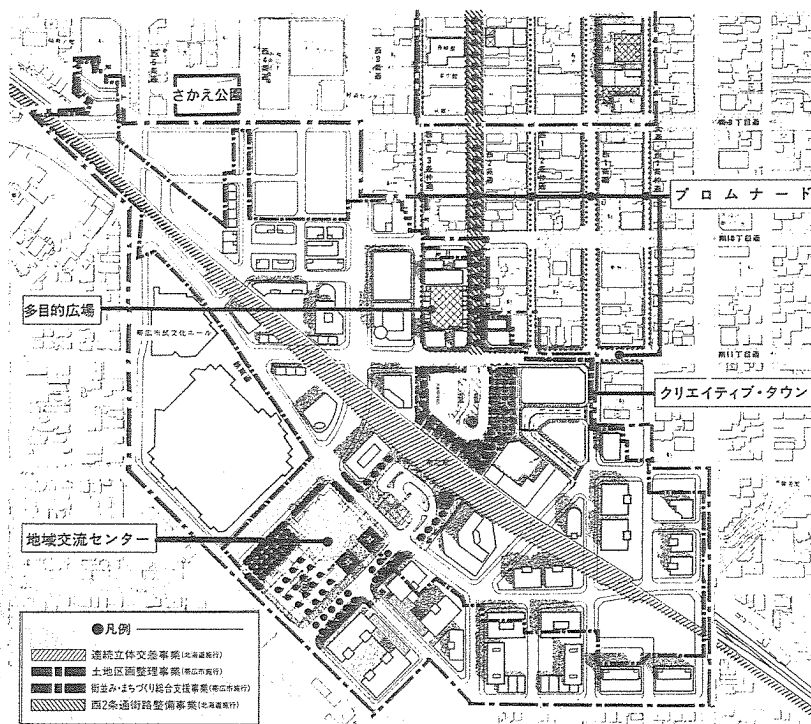


図-6 帯広駅周辺土地区画整理事業

立事業は平成8年に完了して鉄道は高架になり、現在は駅前広場等の整備が進められている。駅前のデザインに、日本都市総合研究所の加藤源さんが以前から熱心に関わってこられて、平成8年度に帯広市が都市計画学会の計画設計賞を受けるなど、地方都市としてはかなりメジャーな土地区画整理事業である。

私の生まれ育った家があった場所はこの土地区画整理区域内にあり、小さな土地は幹線道路にすっぽりと取まって飛び換地され別の場所に移っている。あたりの景色はすっかり変わり、昔の面影は全くない。

土地区画整理区域に接した区域外にさかえ公園と言う公園があるが、その場所は遠く昭和20年代の私の幼い頃の遊び場であった。そこは、十勝会館と呼ばれる今で言う市民会館のような建物と公民館、商工会議所、裁判所といった公的施設に囲まれた場所で、特別に公園らしい整備がされていたわけではないが、ブランコと砂場と滑り台といった子供の遊具の三種の神器があって、その横に子供の眼には大きく見える小山があった。

子供たちはそこを十勝会館の公園と呼び、小山を十勝会館の山と呼んでいた。芝生に覆われた小山は防空壕を埋めてそのまま残したもので、そのことはおとなに教わって子供たちは皆知っていた。専らそこを遊び場にしていた私は遊具に飽きると、山に駆け登ったり、転がり落ちたりして遊んだ。雪が降るとスキーやそり遊びの場になったし、どちらかという遊具で遊ぶより山で遊んだ方が楽しかった。

その後それぞれの施設は別の場所に移り、その空間はさかえ公園という名のきちんとした公園になった。その中に、十勝会館の山は今も残っているが、防空壕の跡の山だということが今も言い伝えられているか、子供たちが今は何と呼んでいるかは知らない。子供の眼には大きく見えただけだったのであろうか、山の周りが少し盛土されたとはいえ今見ると本当に小さな築山でしかない(写真-5)。

建物の中に埋もれ、『視座』としての機能はほとんどないが、今でもその上に立つと、十勝会館の灰色の壁、公民館の水色の板壁、商工会議所の黄色いタイル、裁判所のレンガ塀などの原風景が甦る、私にとっては昔の風景を思い出せる唯一の場所、ふるさとに残された『心の視座』である。

《鶴牧山のその後》このような遊びの幼児体験が潜在意識の中に強く残っていたせいもあって、多摩局在職中、ニュータウンのどこかに小山のある公園を造りたいといつも思いつつ仕事をしてきた。Kさんの「余った土を何とかしろ」という申し出は、私にとって千載一遇のチャンスだったわけである。Kさんの名前は、小宮山満さん(当社前神奈川事務所長)と言う。だから私は暫くの間この山を敬意を込めて「小宮山」と勝手に命名していた。風の便りに、住んでいる人たちに「鶴牧山」と呼ばれて親しまれていることを聞いたのは多摩局を離れて暫く過ぎてからである。

そんな経緯があつて鶴牧山のある鶴牧東公園は、多摩ニュータウンの中で私の一番好きな場所である。今、多摩ニュータウンに車で15分位の所に住んでいるので、たまに子供を連れてニュータウンに遊びに行ったりするが、鶴牧山に登って「この山はお父さんが造ったんだ」と昔を思い出しながら話している。(写真-6)

《朝日山のその後》飯能ビッグヒルズは、その後環境共生まちづくりを標榜してトンネル状防災調節池という新技術を導入するなど、モデ



写真-5 さかえ公園の小山



写真-6 鶴牧山



写真-7 朝日山

ル地区として一時期注目を集めたりもしたが、バブル経済がはじけた後は、土地買収率が高いだけに地価下落の逆風をまともに受けて出口の見えない厳しい局面に立たされ、今はバブルに翻弄された地区の典型であるかのように言われている。

そんな状況下で朝日山のある南台第二地区は平成14年度の一部街びらきに向けた造成工事が現在進行中で、「飯能自然の回廊」は基本計画がまとめられたところでストップしたままであるが、幸い朝日山は今のところ南台第二近隣公園予定地の中に無事に残されている。

先日工事中のゲートを開けてもらって、久しぶりに朝日山のピークに登ったが、ラウンド状に造成されピークは少し低くはなったものの、

飯能ビッグヒルズの街を見渡す格好の『視座』になっている（写真-7）。造成中に発生した岩盤が山裾にそのまま残されており、上手く生かせば今までの公園内の山と違った面白い特長のある設計が出来そうである。

見直し作業が続けられているせいもあって（仮称）南台第二近隣公園は未だ都市計画決定されていない状態と聞いたが、一日も早く朝日山近隣公園という名称で都市計画決定がなされ、早期に整備されることを願うばかりである。朝日山さえ安泰ならば四つのピークは飯能河原を囲んでいつも向かい合い、「飯能自然の回廊」構想は、未完成だがいつか実現する日が来るであろうという夢を残しつつ持続する。（図-7）

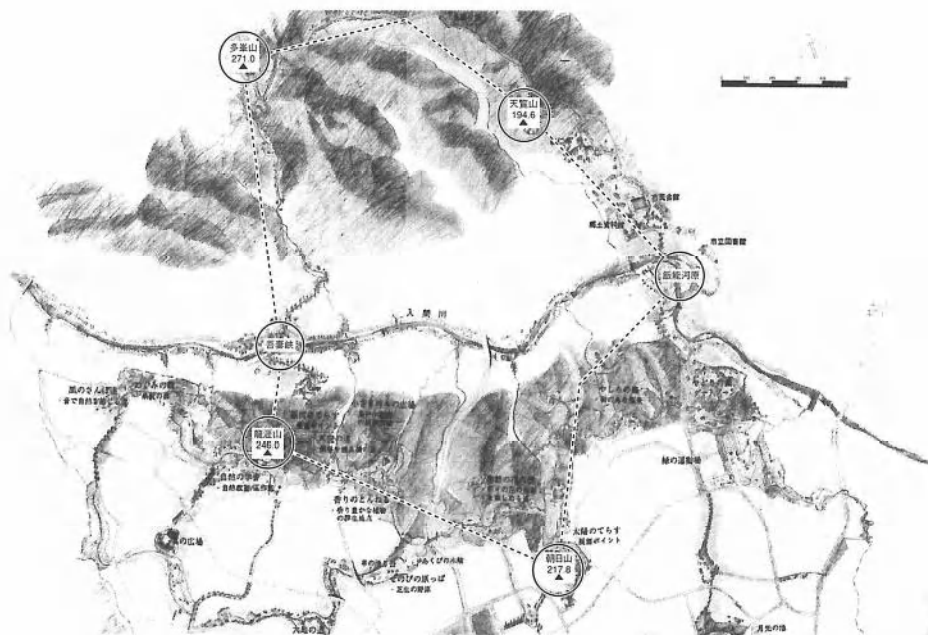


図-7 飯能自然の回廊構想図